

## 「アユ(1)」 体が大きい「一番上り」

### 遡上まで海で成長

4月上旬。神通川では県内のトップを切ってアユ(人工産)の放流が始まる。放流の目安は河川の水温が10℃に達したか否か。以降、海産アユの遡上(そじょう)期間とほぼ同じ5月下旬ごろまで放流が続けられる。放流の開始と時期を同じにして、富山湾からも一番上りのアユが遡上してくる。海からの遡上も水温が10℃に達したころに始まるのである。

一般に遡上アユは、水温が高くなった後期ほど魚体が大きいように思われているが、実は一番上りの体長は9~10cmで、以降に遡上してくるアユよりも大きい。これはなぜだろうか？

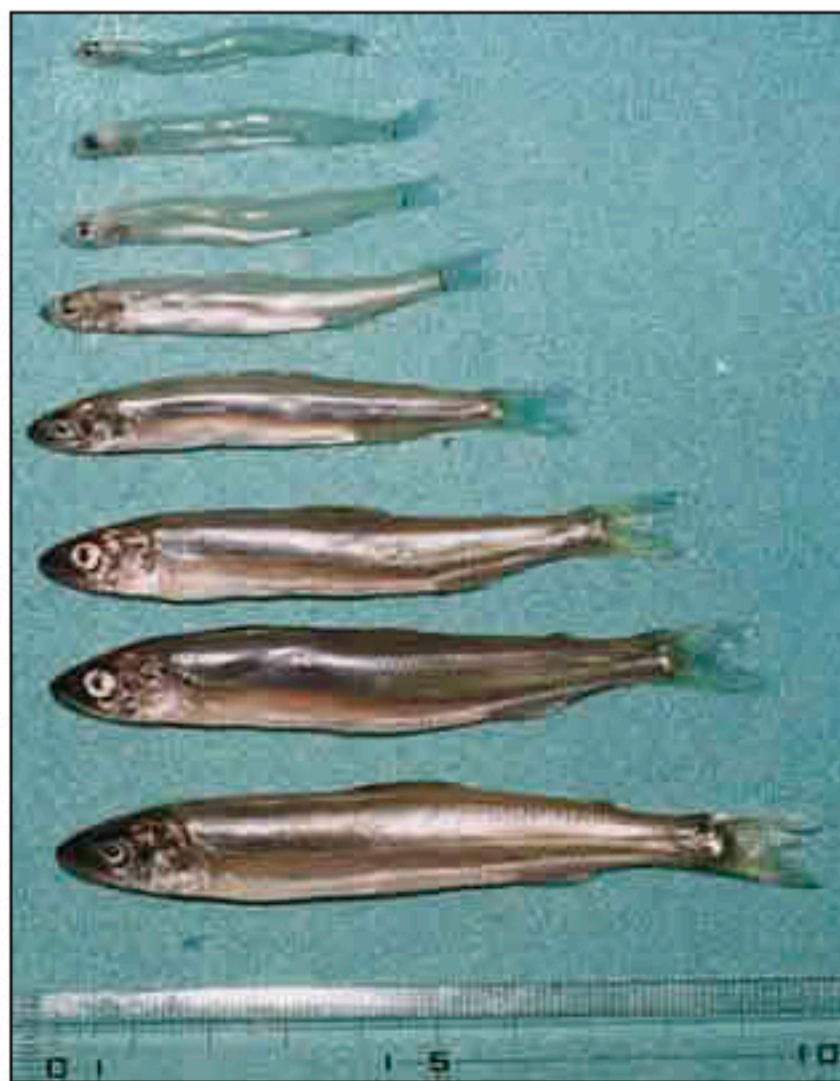
冬の間、富山湾ではアユ仔魚は岸から約3km以内の浅い海域で、動物プランクトンを食べて成長している。早く海に降りて大きく成長したアユは、3月ごろには河川への遡上に備えて河口近くの海域に集まる。歯はすでに石に繁茂した藻類を食べるに適した櫛状歯(しつじょうし)(体長約7cmで生え変わる)になっている。

しかし、河川水温が低いため上るに上れない。このため、河川水温が富山湾の最低水温である10℃近くに上昇するまで、河口付近の海域で滞留を余儀なくされている。

低水温への耐久度は魚体が大きいほど強い。このため、アユの一番上りの魚体は一番大きいのである。逆に水溫が15℃を越えた5月中、下旬になると、小さいアユでも生理的に水溫に耐えられるようになる。事実、神通川や庄川では5月中、下旬に最も小さいアユが遡上してきている。

今年も多くのアユが富山湾から河川へ遡上している。ただ、その資源的な面を考えると黄信号が点っている。例えばアユの産卵には適度の勾配があり、浮き石状態の「瀬」が適しているが、神通川や庄川では長年の砂利採取などの河川工事の影響により、そのような「瀬」の多くを喪失した。

アユを守り、増やすためには、河川や富山湾の良好な環境を維持・復元することが大切である。(田子泰彦)



平成8年4月22日、富山市岩瀬浜で行われた地曳網で漁獲されたアユ。アユは大きな個体から川へ遡上していく